

今帰仁村の手踊りエイサー

— 本部半島の他地域との比較を通して —

小林 公江・小林 幸男

はじめに

沖縄の盆の芸能であるエイサーには、数多くの大太鼓や締太鼓、あるいは半打ぼーらん鼓くを打ちながら太鼓衆が勇壮に踊る太鼓エイサーと、手踊り衆の踊を中心に展開する手踊りエイサーがある。実際は太鼓衆中心のエイサーにも手踊を伴うものは多く、手踊が中心のエイサーにも太鼓衆の踊を含むものがあるなど、エイサーの形は、隊形や衣装、担い手の性別、伴奏楽器とも相俟って多様である。

沖縄本島北部の本部半島地域では、三線伴奏による男女の手踊の円陣エイサーが多数伝承されている。三線弾きの歌に踊り手が囃しを返しながら、本調子と一二揚¹の各調弦毎に、速いテンポで十数曲を連続して歌い踊るのがこのエイサーの特徴で、戦後、太鼓エイサーを導入した区もあるが、名護市もとぶ、本部町なまきじん、今帰仁村せんで、字誌などの記述も含めると60箇所以上の伝承が確認でき、この地域でいかにこの種のエイサーが盛んに行われてきたかを窺い知ることができる。

本稿では、1993年～2007年の筆者の調査を基に、今帰仁村17区のエイサーについて、その伝承状況を報告しつつ、音楽と舞踊の両側面から、村内各区の比較、名護市西部²・本部町のエイサー³との比較を通して、今帰仁村の伝統的な手踊りエイサーの特徴を明らかにしようと試みた。

1. 今帰仁村のエイサー概観

今帰仁村（以下「今帰仁」とする）では手踊りエイサーを、「エイサー」「七月しちぐわちエイサー」「七月しちぐわちもーい舞」「七月みく巡い」などと呼ぶ。太鼓エイサーの導入区では、手踊りエイサーを「島エイサーしま」「昔エイサーんかし」と呼んで区別する。この他、通常の輪踊でないものを「まがやー」と呼んで区別する区もある。

手踊りエイサーは、今帰仁の全19区のうち、古宇利⁴を除く18区（今泊・兼次・

しよし よ なみね なかおし さきやま へしき じゃな こえち なかさね たましろ ご がやま わくがわ
 諸志・与那嶺・仲尾次・崎山・平敷・謝名・越地・仲宗根・玉城・呉我山・湧川・
 あめそこ せ りきやく と き じん かみうんでん うんでん
 天底・勢理客・渡喜仁・上運天・運天)で長く伝承されてきた。しかし、呉我山
 では24、5年前に途絶したため、現在の伝承は17区である。このうち、崎山・湧
 川・天底・渡喜仁の4区では手踊りエイサーとは別に太鼓エイサーを導入し、青
 年層は太鼓エイサー中心に活動している。

以上を踏まえ、全体的な行事の次第、練習と衣装、各区の手踊りエイサー伝承
 状況を簡単にまとめておこう。なお、今帰仁では、三線弾きは「地謡」「三線弾
 ちゃー」^{ちかた}「地方」、景気づけの太鼓(縮太鼓と鉦留め太鼓の組み合わせ、あるいは
 縮太鼓)の打ち手は「太鼓打ちちゃー」と呼び、三線弾きの歌に対する踊り手の歌
 や囃しは「返し」または「へーし(囃し、返し)」と呼ぶ。また、即興的にかける
 「イヤササ」などの掛声は「や声」^{こい}という。

(1) 行事の次第

古老や壮年層がエイサーを行っていた時代の担い手は青年会で、昭和40年代頃
 までは、大抵旧暦7月15日(16日の区も)に夜を徹して各家庭を廻り(=ちねー
 巡い)^{みく}、廻りきれなければ翌16日(17日)にも廻ったという。その後、青年達
 が本島の中南部に軍作業などの職を得て離村するようになると、担い手の減少か
 ら家廻りは行われなくなり、新築の家や商店、あじまー(=四つ辻)で踊る形(=
 あじまー巡い)へと変化した。これと並行するように1975年前後からは、あさぎ
 庭や公民館の広場などに櫓を建てて行うエイサーが広まっている。

現在ではどの区でもこうした広場での催しが盛んで、門付けを続ける区でも旧
 暦15日か16日(あるいは両日)の夜には広場でエイサーを挙行し、区民が揃って
 参加する。催しには、子ども会の太鼓エイサーや婦人会・老人会の踊、民謡の披
 露、カラオケ大会やビンゴ・ゲーム、ビールや牛乳の早飲み大会など様々な企画
 が盛り込まれ、その合間合間にエイサーが幾度も踊られる。そして、最後は大抵
 花火(青年が打ち上げ花火などを行う)で締めくくられる。

広場のエイサーは青年だけでなく区民も参加するので、踊の輪も大きく、賑わ
 う。ここでの曲目は本調子と一二揚の全レパートリィで、門付けのように省略す
 ることはない。今も門付けだけでエイサーを伝承する本部町の幾つかの区では、
 門付けで踊る曲だけを練習してきた結果、本調子の曲だけが伝承されるという現

象が起きているが、今帰仁では、比較的早くから広場でのエイサーが定着したためか、今も本調子・一二揚ともに数多くの曲が傳承されている。

今帰仁では豊年祭も盛んで、大半の区では毎年乃至4年に一度、旧暦8月15日頃に大がかりな祭を挙行し、区民こぞって歌や踊を演じ、観て楽しむ。毎年人々が集って共に踊るエイサーのような機会は区民にとって貴重であり、とりわけ豊年祭を行わない区では、こうした催しの持つ意味は更に大きい。

(2) 練習や衣装

現在、エイサーの練習は大抵公民館の庭で1週間程度行われるが、踊り馴れた壮年層が中心の区ではほとんど行わないことさえある。かつては期間も長く、初めのうちは音が集落に届かないように離れた場所で、また、盆が近づくと集落の近くで行うようにしていたという。

衣装は、かつて芭蕉衣 [今帰仁村史編集委員会 1975: 235]であったというが、現在は今泊が浴衣で揃える以外は普段着に法被を羽織るのが一般的である⁶。法被は背に「祭」と染めた青地か赤地の市販のものや、区独自の意匠で作ったもの(例えば玉城の黄色や仲尾次の青い法被など)である。また、1975年開催の沖縄海洋博覧会時に取り入れられた博覧会のロゴ入りのアロハシャツや法被も、今なお大切に用いられている。

踊はほとんどが素手だが、曲によって渡喜仁で扇と采、上運天で扇、兼次と諸志ではタオルを用いる。こうした持ち物は、渡喜仁以外は戦後になって取り入れたものである。

(3) 各区の傳承状況

各区の傳承状況は年ごとに變化する。ここでは「～年前」という記述のみ2007年時点に合わせたが、それ以外は調査時(地名横の年号)の状況を中心にまとめた。したがって、現状と異なる場合もあることを予め断っておく⁷。

今泊 (1993・1994・1997)

今帰仁と親泊が、1903(明治36)年の合併と3年後の分離を経て、1972年に再合併してできた区である。エイサーは別々に行っていたものを一つにまとめたという。円陣の踊の他に縦列の踊が1曲ある。一時途絶えた時期があったが、1993

年の青年会復活とともに復活し現在に至る。門付けと広場でのエイサーの両方を行う。衣装は浴衣である。なお、離れた小字^{あざ}の東上原では、近年まで独自にエイサーを行っていた。

兼次 (1993・1994)

戦前のレパートリィは他区とほぼ同じだが、戦後に新しい曲を多数導入し、レパートリィが大幅に変化している。これに伴い踊も変化し、タオルを持つ踊や縦列の踊などが複数取り入れられた。青年会中心で、門付けと広場でのエイサーの両方を行う。

諸志 (1995・2003・2006)

1903(明治36)年に諸喜田と志慶真が合併してできた区である。近年は、中断を繰り返しながらも、青年会主催によりあさぎ庭でエイサーを行っている。戦後に縦列の踊を取り入れているが、これらは兼次とよく似ている。

与那嶺 (1994～1997・2001・2003)

青年会中心で、門付けと広場でのエイサーの両方を行う。

仲尾次 (1996)

1961年に7年ほどの中断を経て復活したが、その際、教育的な配慮から子ども達に相応しくない歌詞を省略するようにしたという。復活時にはエイサーを《念仏》で開始したが、その後、上間久次郎氏が青年会長時代に作った《どんとどっこい》から始まるようになった。

崎山 (1993・1994・2004・2006)

2004年の青年会再結成と同時に太鼓エイサーを湧川から導入し、門付けを行っている。青年会は広場でのエイサーも主催するが、手踊りエイサーは壮年層(消防)が伝承している。

平敷 (1998・2004)

青年が少なくなったため、1998年以降、実行委員会を組織して広場で举行している。縦列の踊も1曲伝承しているが、昭和40年代に今泊から習ったものという。

謝名 (1996・1997・2004)

青年会主催により公民館の広場でエイサーを行う。

越地 (1994・1996・1997・2003～2006)

1937(昭和12)年に謝名と仲宗根から分かれてできた区である。エイサーは区

ができる前から独自に行っていたが、戦前も長く中断していたようで、1947（昭和22）年に古老の指導で復活した当時、青年達はエイサーを全く知らなかったという。現在は青年会主催でウヘー（越地農村公園）でエイサーを行う。縦列の踊2曲は、平敷と天底から習ったものである。

仲宗根（1993・1995・1998・2001・2004・2005）

門付けと広場でのエイサーを行う。近年、この両方に参加する小学生も見受けられ、地謡がエイサー工工四を作成するなど、積極的な活動がみられる。戦後の歌詞に「民主主義なやい～男女同権」という歌詞が含まれているのが興味深い。

玉城（1993・1995・2006）

たもおし きしんとう そーじ
玉城・岸本・寒水の3集落が1903（明治36）年に合併してできた区である。古老（1935年生）によれば、エイサーは3集落合同で旧公民館の広場で踊っていたが、後に家廻りも始めたという。かつては扇や竹様のものを持つ踊があり、一時期は隊形変化を伴う新歌詞の《念仏》も行ってた。青年層の減少で中断し、1993年の青年会復活と共にエイサーも復活したが、曲数はかなり減少し、前述の踊も途絶えている。門付けと広場でのエイサーの両方を行う。

湧川（1998・2002・2004）

古老（1926年生）によれば、呉我山や天底辺りのエイサーを金城東喜さん達が中心になって覚え、1931（昭和6）年に「二班」中心で踊ったのがエイサーの始まりであるという。当時は男性のみだったが、戦後、区の青年会行事として位置づけられ、女性も参加するようになった。現在、青年会は1980年頃に名護市港から習った太鼓エイサーで門付けする。手踊りエイサーは青年を含め、広場でのみ踊られ、実質的な伝承は壮年層以上が担っている。

天底（2000・2003）

40年余り前、今帰仁で最初に太鼓エイサーを導入した。手踊りエイサーは太鼓エイサー導入後も青年会主催の祭で行われていたようだが、その後は中断。2003年に15年ぶりに本調子の曲のみが復活した。古老（1928年生）によれば、家廻りの際、新築の家では全曲を披露し、その他では本調子しか踊らなかったという。37～40年ほど前に中南部の《念仏》《久高万寿主》《南嶽節》などを取り入れている。

勢理客 (1998・2001)

青年が少ないため、エイサーは向上会 (55～64歳)、消防、PTA、婦人会、老人会等の協力のもと、警察の許可を得て公民館前の道路を通行止めにして行っている。人口が少ないため、「不幸 (=不祝儀)」が多い年には御願うぐわんエイサー (あさぎ・獅子屋・ぬる屋で行う) だけを行うこともある。

渡喜仁 (1997・2006)

1940 (昭和15) 年頃に勢理客から独立した区で、エイサーはそれ以前から独自に行っていた。80年ほど前、渡喜仁出身で旧久志村 (現名護市久志地区) に住んだ石川氏が青年に教えたという伝承から「久志間切エイサー」と呼んでいたが、「まがいエイサー」という呼び方もある。曲の大半は、歌・踊とも他区と共通するが、扇や采の踊、特殊なレパトリィは久志からの伝承であろうか。戦前は男性のみが伝承してきた。2004年に青年会は太鼓エイサーを導入したが、手踊りエイサーも併せて伝承しており、広場での催しで踊っている。

上運天 (1998・2003・2006)

エイサーは消防が中心で伝承し、広場の催しで踊る。古老 (1930年生) によれば、かつては円陣のまま2人組になって向かい合って踊る《仲門なかじよーびー兄》⁸もあったというが、30年以上行われていない。この曲は「まがや一節」⁹などとも呼ばれていた。

運天 (1993・2003)

10年ほどの中断を経て、27年前に復活し、その後も復活当時の青年会メンバーを中心に伝承している。元は男性のみで伝承していたが、復活時から婦人も加わるようになった。通常、広場での催しだけで踊るが、字誌作成の資金集めのため2年ほどあじま一巡いをしたことがあるという。

2. 手踊りエイサーの音楽

(1) レパトリィ

現行のレパトリィは、行事の簡略化や門付け時間の短縮などにより縮小しつつある。このため、本稿では、聞き取りによって得た、戦前もしくはエイサーが盛んであった昭和30～40年代の情報を加えてレパトリィを検討した。ここでは、それを基に今帰仁の基本的なレパトリィを抽出し、名護市西部・本部町 (以下、

名護、本部とする)のレパートリィと比較する。なお、曲名は、一般的な曲名あるいは歌い出しの歌詞を筆者が便宜的に曲名としたものである。

① 今帰仁のレパートリィ

表1は、今帰仁の複数の区で伝承されている曲を伝承数の順に並べ、併せて本部や名護の伝承状況も示したものである。表からわかるように、今帰仁のほとんどの区で伝承されている曲、あるいは3分の2以上の区で伝承され、かつ地域的な偏りがみられない曲は以下のとおりである。これらの曲は、今帰仁の基本レパートリィと考えてよいであろう。

本調子……《ニ合小》《テンヨー》《稲摺節》《今帰仁ぬ城》
ニゴウグワウ イニシリ ぐしく
うみ あがり くだがまじゅーすー
 《海やからー》《スーリ東》《久高万寿主》

一二揚……《カマヤシナー》《ダク節》《仲門兄》《谷茶前》
あかやま うみ ぼーらー
 《ダンスナー》《赤山》《海ぬちん法螺》《イルサスナー》

次に、やや伝承数が少ないがほぼ半数以上の区で伝承され、かつ、分布に偏りのない曲も以下のようにかなり多い。これらの曲は基本レパートリィに準じる曲と考えたい。

本調子……《伊舎堂前》《健堅辺名地》《九年母ん木》《三村節》
いさどうめー きんきんひなぢ くにぶぎー みむら

一二揚……《だんじゅ嘉例吉》《加那ヨー》《十七八節》《汀間とう》
かりゆし カナー じゅうちはち ていーま

以上の曲はいわば村全体に共通するレパートリィだが、これに対して以下の曲は、村の西側(今泊～越地・仲宗根)と、東側(玉城～運天)とに分布が分かれ、それぞれの区域での基本レパートリィと捉えられる曲である。

西側 本調子……《念仏》《前田節》《一路平安》《唐船どーい》
にんぶち めんたー イチロヘイアン とーしん

一二揚……《蔓葉》《ヨー加那ヨー》《副業節》
かんだぼー カナー

東側 本調子……《苺小》《あさぎぬ前》
いちゆびぐわー めー

以上のように、今帰仁エイサーでは、かなり多くの曲が村全体で共通すると同時に、東西で異なるレパートリィを伝承しているということが明らかとなった。

② 今帰仁と本部半島他地域とのレパートリィの比較

前述のレパートリィは、名護や本部ではどのような位置にあるのだろうか。

表1にみられるように、今帰仁の基本レパートリィは、本調子の場合、半数に達しない名護の《海やからー》、本部の《スーリ東》を除けば、両地域の基本レパートリィかそれに準じる曲である。一二揚の場合は、名護や本部にほとんど伝

表1 手踊りエイサーのレパートリィ 上段……本調子 下段……二揚

曲名	区名	今	兼	諸	与	仲	崎	平	謝	越	仲	玉	湧	天	整	渡	上	運	計	名	本	
		泊	次	志	那	尾	山	敷	名	地	宗	城	川	底	客	喜	天	天		護	部	
基本レパートリィ	二合小	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	17	○	◎	
	テンヨー	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	17	◎	◎	
	稲摺節	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	17	◎	◎	
	今帰仁ぬ城	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	17	○	○	
	海やからー	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	17	△	◎	
	スーリ東	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	16	◎	△	
	久高万寿主		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	14	◎	◎	
	伊舎堂前		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	11	○	○	
	健堅辺名地		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10	×	▽	
基本	九年ん母木	○	○	○			○										○		8	×	1	
	三村節			○	○	○			○	○			○	○				○	8	◎	▽	
	念仏	○	○	○	○	○	○	○	○	○		□		□		□			12	◎	◎	
	前田節	○	○	○	○	○	○	○	□	○	○								9	×	◎	
	一路平安	○		○		○	○	○	○	○		○	□		□				8	△	◎	
	唐船どーい*		?	○	○	○	○		○	○									6	×	×	
	母小							?			○	○	○	○				○	6	◎	△	
	あさぎぬ前										○	○	○	?	○	○	○		5	×	×	
	白保節			○			□	○	○	□				○	○				7	▽	▽	
他の複数区伝承曲	目出度イ節					○	○	○						○	○		○		7	◎	▽	
	アッチャ舞小		○								○	○							3	▽	1	
	新安里屋ユンタ		○			○						○							3	×	×	
	越来節		○	○										○					3	◎	△	
	真山節		○	○															2	×	1	
	錦紗ぬ縮緬						○	○											2	×	×	
	スンサーミー																○		1	○	1	
	糸満人																		0	×	○	
	基本レパートリィ	カマヤシナー	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	17	◎	◎
ダング節		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	17	◎	◎	
仲座兄		○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	16	○	◎	
谷茶前		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○		15	◎	◎	
デンスナー		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				14	×	1	
赤山		○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○			○			13	▽	▽	
海ぬちん法螺		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			?		13	◎	◎	
イルサスナー		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○					12	▽	△	
だんじゅ嘉例吉			○				○		○	○	○	○	○	○		○	○	○	11	△	△	
基本	十七八節		○	○	○				○	○	○	○	○	○					9	1	▽	
	加那ヨー	○	○	○	○	○					○			○	○				9	△	×	
	汀間とう	○	○	○	○		○		○				?	○		○			8	▽	1	
	偏り	蔓葉	○	○	○	○	○													6	×	×
		ヨー加那ヨー			○	○	○	○	○	○										6	×	×
		副業節一		○	○	○		○				○								5	×	○
	他の複数区伝承曲	弥勒節	□	○	□	○	○						○							6	×	1
		ましゅんく		○		○									○		○			4	×	1
		汗水節		○		○						○			○					4	▽	×
世願節			□					□	□	○									4	×	1	
東前門				○		□		○											3	△	○	
姉小達						○	○								○				3	1	△	
帽子くまー						○	○					○							3	×	▽	
シカンバヨーハリ												○			○	○	○		3	×	▽	
他地域		下庫裡小												○						1	◎	△
	ヘイヨー																		0	○	×	
	遊びヌ清ラサ																		0	×	◎	

今帰仁 ○、□……現行曲、古老からの聴取による曲、歌詞集掲載曲 ○は標準的なもの、□は違いが大きいもの

○ ○ ……2種の踊りを伝承する曲 ?……確定できないもの

名護・本部 ◎……基本的なレパートリィ ○……準基本的なレパートリィ △……5箇所以上の伝承があるもの

▽……2～4箇所伝承があるもの 1……1地区のみで伝承 ×……伝承なし

* この表では《唐船どーい》はエイサー曲として踊りを伴うもののみ対象とし、入退場曲は含めていない。

承されていない《デンスナー》、数の少ない《赤山》《イルサスナー》を除けば、やはり両地域でも多い。したがって、今帰仁の基本レパートリィは、本調子がほぼ他地域と同じで、一二揚に若干の違いがみられることがわかる。

では、基本レパートリィに準じる曲はどうであろう。本調子の《念仏》¹⁰や《伊舎堂前》は名護や本部でも多くみられる。一方、《三村節》は名護では基本レパートリィだが、本部での伝承は少ない。また、本調子の《健堅辺名地》《九年母ん木》、一二揚の《十七八節》《汀間とぅ》は名護や本部では伝承数が少なく、今帰仁のみが独特の広がりを見せている。《加那ヨー》は本部には全くないが、名護では今帰仁に近い分布がある。このように、このカテゴリーの曲は三地域でそれぞれ異なるありようを示すが、今帰仁のレパートリィは比較的ヴァリエティがあるように見える。

次に、今帰仁内で地域的な偏りがある曲をみると、西側に多い本調子《前田節》《一路平安》、一二揚《副業節》は名護で皆無である一方、本部では基本レパートリィかそれに準じる曲である。一二揚の《蔓葉》《ヨー加那ヨー》は名護や本部には全くみられない。他方、東側の本調子《葎小》は名護の基本レパートリィで、本部でも伝承数が比較的多いが、《あさぎぬ前》は両地域とも全く伝承がない。このように、西側の本調子のレパートリィは本部と共通すること、一二揚には今帰仁独特の曲が多いこと、の二点が指摘できる。

さて、ここで、これまで検討してこなかった名護や本部に多いレパートリィからも考えてみよう。名護の《^{くいーく}越来^{しちやく りくわー}》《^{いーく}スンサーミー》、本部の《^{いちまんちゆ}糸満人^{アシ}遊^{チュ}ビヌ清ラサ》がこれに当たる。名護の《^{いーく}ヘイヨー》《^{いーく}スンサーミー》は、本部町伊豆味の《^{いーく}スンサーミー》を除き他地域では伝承されていないが、その他は、数の多少に違いがあるものの複数の伝承がみられる。一方、本部のレパートリィは名護や今帰仁では全く伝承されていない。このように名護や本部にも地域独自のレパートリィがあるが、今帰仁に比較するとやや数が少ないように見える。

以上、今帰仁の基本レパートリィは本部や名護とかなりの部分で共通するが、それでも今帰仁では独特のレパートリィが多く、特に一二揚にその傾向が強い。さらに、基本的なレパートリィに準じる曲も多様で、これも一二揚に独特な曲が多い。地域的に偏りがみられる曲も同様であり、加えて、分布数があまり多くな

い曲の中にも《世願節》《弥勒節》などのようにエイサー曲としては独特な曲も取り込んでいる。

本部半島の各地は伝承過程で様々に曲を取り入れたり廃したりしてきた。今や明治・大正期の動向を知ることはできないが、現在たどることのできるレパートリーから見る限り、今帰仁は本部や名護に比べてより多様な曲を取り込んでいるということが出来る。

(2) 同系旋律にみられる共通性と相違性

今帰仁で伝承数の多い曲を取り上げ、歌詞と旋律の両面でありようを検討し、名護や本部とも比較すると、次の四つに大別できる。

- ① 本部半島全域で歌詞がほぼ同じもの
- ② 今帰仁内では歌詞が共通するが、他地域とは異なるもの
- ③ 今帰仁内で歌詞や囃しに違いが認められるもの
- ④ その他

以下、各分類に従って述べていこう。

① 本部半島全域で歌詞がほぼ同じもの

本調子……《二合小》《伊舎堂前》

一二揚……《谷茶前》《赤山》《十七八節》《汀間とう》

これらは一般的な沖縄民謡としても有名で歌詞も定まっているので、エイサー曲としての独自性は少なく、地域差があまりみられない。

② 今帰仁内では歌詞が共通するが、他地域とは異なるもの

本調子……《テンヨー》《念仏》

一二揚……《だんじゅ嘉例吉》

《テンヨー》 エイサーの定番である《テンヨー》は、本部半島以外でも区ごとの歌詞の異同が多いが、今帰仁では15の伝承地のうち12区で「東ん門ぬ月橋 枝持ちぬ清らさ」と歌われており、共通性が高い。本部半島でこの歌詞を伝えるのは今帰仁と隣接する本部町伊豆味のみであるため、これは今帰仁独特のものということになる。

また、上記歌詞の下句は「うりが下うとてい 遊び出来らさや」とか「吾達女童ぬ 胴持ち小ぬ清らさ」などだが、上句と下句が同系旋律を繰り返すためか、

上句に必ずしも下句が続かず、異なる琉歌の上句ばかりが続くことも多い。上句が続く傾向は他地域でも認められるが、今帰仁ほどではない。

《念仏》 エイサーの中核である《念仏》は、西側の今泊～越地9区と玉城・天底・渡喜仁（表1で□印「違いが大きいもの」として示した）で伝承が確認される。このうち今泊～越地の曲は沖縄に一般的な《念仏》の上句旋律で構成されるもので、本部や名護の大半の《念仏》と同系である。これに対し、玉城・天底の曲は全島で一般的な《念仏》で、前者は過去に4年ほど新しい歌詞と振付で導入したもので、後者は1970年頃に中南部から^{あざ}字の人が習い覚えたものである。また、渡喜仁の曲は一般的な《念仏》の下句旋律で、これは「久志間切エイサー」を取り入れたことに起因していると思われる。したがって、西側9区の《念仏》が今帰仁の伝統的な《念仏》とみることができる。他方、東側全域にこの伝統的な《念仏》がないことについては、古老も歌ってこなかったことからみて、伝承過程で欠落したのではなく、この区域には初めから《念仏》が伝わらなかったのではないかと推察される。

歌詞は1区を除き、「七月になりば（あるいは、七月や八月や）^{はちくわち} みちや^{ぶとうき} 仏ん^{かざ}飾^{かざ}てい」である。この類の歌詞は、本部半島でも今帰仁に隣接する本部町伊豆味にのみみられることから、今帰仁の《念仏》の特徴と捉えてよい。他には「^{みな}弥陀ヨ^{すだ}弥陀ヨ^{がらし}仏」（今泊）、「山に育ちやる山ユ鳥」（兼次）などの歌詞も伝承されている。前者は隣接する本部町具志堅と、また後者は本部や名護とも共通する。

《だんじゅ嘉例吉》 この歌は一般の民謡としては「だんじゅ嘉例吉や 選でいさしみせる～」と歌うが、本部半島のエイサーでは地域ごとに特徴のある歌詞がみられる。今帰仁ではほとんどの伝承地が《谷茶前》の歌詞で歌うが、この歌詞は今帰仁に限られる。

③ 今帰仁内で歌詞や囃しに違いが認められるもの

今帰仁内での違いは、以下の3種にまとめられる。

- a. 歌詞本体が異なるもの b. 囃しが異なるもの
 - c. 歌詞・囃しとも異なるもの
- a. 歌詞本体が異なるもの

本調子……《海やから一》《健堅辺名地》 一二揚……《仲門兄》

《海やから一》 この曲はエイサーの定番で、旋律・歌詞ともほぼ同じものが沖

縄各地で伝承される。今帰仁も西側では一般的な歌詞が歌われるが、謝名から東側は各区で「海やからに惚^ふりてい 岸本^{きしむと}さんかに泊^{とま}てい 明日^{あちや}ぬ夙^{ひてい}みていぬ 我^わ暇^{ひま}如何^{ちや}すが」と歌う。「岸本^{きしむと}さんかに泊^{とま}てい」という表現は、この区域特有のものである。

《健堅^{けんけん}辺^{へん}名^な地^ち》 「シトウ^シヨー^エテン^エヨー^エ エイ^イサー サー^イエイ^イサー イヤウ^イリ^イサー サー スー^イリ^イサー^イサー」という囃しのアンダーライン部分は、旋律を含め《念仏^{にんぶつ}》の囃しと全く同じである。歌詞は二種あり「七月^{しちがつ}念^{ねん}仏^{ぶつ}破^やり笠^{がさ}被^かしてい〜」（崎山・越地）のように「七月^{しちがつ}念^{ねん}仏^{ぶつ}」を含む歌詞から始まる区では、したがって《念^{ねん}仏^{ぶつ}》と同じように歌われたり、念^{ねん}仏^{ぶつ}に続^つけて歌^うわれる。一方の「健^{けん}堅^{けん}辺^{へん}名^な地^ちや 川^か隔^らみてい 哀^ありすらどーや」の歌詞は、兼次^{けんじ}の古^{ふる}老^らによれば「これで一連^{いちれん}の踊^{おど}は一旦^{いちだん}終^{しま}わり」という符牒^{ふだ}として使^{つか}われたという。本部^{なま}町^{ちやう}東^{とう}部^ぶの旧^{ふる}上^{かみ}本^{ほん}部^ぶ村^{むら}区^く域^いではこの歌詞は今^{いま}でも符牒^{ふだ}の役^{やく}割^{わり}を持^もつてい^る（但^{たゞ}し、上^{じやう}記^きの囃^{はし}しはな^い）ので、旧^{ふる}上^{かみ}本^{ほん}部^ぶ村^{むら}に近^{ちか}い西^{せい}側^{がわ}にはこ^こうした見^み方^{かた}が伝^{でん}わつてい^たのであ^らうか。しか^し、現^{げん}行^{ぎやう}の今^{いま}帰^{かへ}仁^に曲^{きょく}には曲^{きょく}順^{じゆん}を見^みる限^{かぎ}りそ^うした用^{よう}法^{ぽう}はな^い。

《仲^な門^{かど}兄^{あに}》 本^{ほん}部^ぶ半^{はん}島^{しま}一^{いち}帯^{たい}では、エイ^イサーに限^{かぎ}らずこの曲^{きょく}に多^{おほ}くの歌^{うた}詞^しの伝^{でん}承^{じやう}がある^{ので}、エイ^イサーもそ^こから歌^{うた}詞^しを選^{せん}択^{たく}して歌^うつてき^たものと思^{おも}われ^る。今^{いま}帰^{かへ}仁^にでは西^{せい}側^{がわ}で歌^{うた}詞^しの種^{しゆ}類^{るい}が少^{すく}なく、東^{とう}側^{がわ}の歌^{うた}詞^しの方^{かた}がいく^らか多^た様^{やう}である。

b. 囃し^{はし}が異^いなるもの

本^{ほん}調^{てう}子^し……《久^く高^{たか}万^ま寿^{しゆ}主^{ぬし}》《稻^い摺^{すり}節^{ふし}》《スー^いリ^い東^{とう}》《今^{いま}帰^{かへ}仁^にぬ^ぬ城^{じやう}》《三^{さん}村^{むら}節^{ふし}》
一^{いち}二^に揚^{やう}……《ダ^だン^んク^く節^{ふし}》《加^か那^なヨ^よー》

《久^く高^{たか}万^ま寿^{しゆ}主^{ぬし}》 この曲^{きょく}は曲^{きょく}尾^びの囃^{はし}しが東^{とう}西^{せい}で異^いなり、東^{とう}側^{がわ}の方^{かた}が長^{なが}い。

西^{せい}側^{がわ} ……ス^すリ^りサー^さー エ^えイ^いス^すリ^りサー^さー イ^いヤ^やウ^うリ^りサー^さー

東^{とう}側^{がわ}（勢^{せい}理^り客^{きゃく}〜）……上^{じやう}記^きに更^{さら}に「ヒ^ひヤ^やサ^さヌ^すサー^さー ナ^な白^{はく}」が^つ続^つく

囃^{はし}し詞^しは、い^いずれも名^な護^ごや本^{ほん}部^ぶの囃^{はし}しとはや^や異^いなる。な^お、本^{ほん}部^ぶ半^{はん}島^{しま}地^ち域^いのもの^ははテ^てン^んポ^のの^おお^おきな違^{ちが}い^{から}2^こ系^{けい}統^{とう}に^{ぶん}類^{るい}でき、今^{いま}帰^{かへ}仁^にと本^{ほん}部^ぶが速^{すみ}い^{タイプ}、名^な護^ごが遅^{おそ}い^{タイプ}である。ま^た、今^{いま}帰^{かへ}仁^にでは「久^く高^{たか}万^ま寿^{しゆ}主^{ぬし}や 清^つら^ゆー^べーと^うめ^てい（ある^{いは}、か^めー^てい）ひ^んが^ち〜」と^う歌^うが、^ひんが^ち」（逃^にして、の^い）と^うい^う表^ひ現^{げん}は今^{いま}帰^{かへ}仁^に以^い外^{がわ}では^みら^れな^い。

《稻^い摺^{すり}節^{ふし}》 曲^{きょく}尾^びの囃^{はし}しが東^{とう}西^{せい}で異^いなる。

西^{せい}側^{がわ}の各^{かく}区^く ……稲^い摺^{すり}摺^{すり} ^{イニシ}米^{こめ}選^{せん}り^{クミユ}選^{せん}り イ^いヤ^やサ^さ ウ^うリ^りサ^さ

東側（勢理客～上運天）……上記に更に「ナンチャ面白^{ウムシル}」

（渡喜仁）……上記に更に「スーリサーサー」

これらの囃しは、いずれも名護や本部の囃しとは幾らか異なっている。

《スーリ東》 この曲は、曲尾や曲頭の囃しが異なる。

1. 兼次・諸志……スーリサーサー スラヤサ ハイヤ イチユイチユイチユ

2. 与那嶺・仲尾次・崎山……（前半は同じ） ミジ 珍ラサ 珍ラサ

3. 謝名・越地・玉城……スイ ヤ イ チャー 首里カイ行チュシガ 遣ラスミ如何スガ

スディグワー 袖小カチミティ イスンケスンケスンケ（曲頭）

……スーリサーサー スラヤサ ハイヤ（曲尾）

4. 仲宗根・湧川・整理客・上運天・渡喜仁……1. の _____ 部分がない形

1～4はそれぞれ隣接する区でまとまっている。交流の深さを示す証だろう。

名護や本部は概ね4で、3のような長い囃しがつく地域もある。なお、今帰仁では、「スーリ東うち渡^{あがり}てい^{わた}く（スリスーリヌ）飛^とぶる^{あやはべる}綾蝶」のように囃し（くく）部分を挟み込んで歌う。伝承数の少ない本部も同様だが、名護では今帰仁や本部に近い区だけがこのように歌う。

《今帰仁ぬ城》 この曲は、曲尾の囃しが僅かに東西で異なる。

西側 ……サーヒヤルガヘイササ ヒヤルガヘイ

東側（天底・勢理客・渡喜仁・上運天・運天）……上記に更に「ササ」

名護・本部の囃しは西側のものと同じである。

なお、今帰仁では「今帰仁ぬ城^{くしく} ヨンサー^{しむない} 霜成ぬ九年母^{く に ぶ}～」と、歌詞の間に「ヨンサー」を挟み込んで歌うが、名護と本部ではこの部分がないのが一般的である。ただし、安和・旭川（以上、名護の屋部地区）、伊豆味・備瀬（以上、本部）など、今帰仁に近い区はこの歌い方をする。

《三村節》 東側の湧川と運天では、囃しに「ナンチャ面白」がつく。

《加那ヨー》 歌詞は一般的な民謡の《加那ヨー》と同じく「加那ヨー^{うむかぢ} 思影ぬ^た 立ていばヨー加那ヨー～」だが、西側では「ヨー加那ヨー」の後に〈加那ヨートウヨー加那ヨーサイ ヨサイヨサイヨサイ〉のような囃しを入れる。東側はこうした囃しは入れない。名護も同様である。

《ダンク節》 曲尾の囃しが東西で異なる。

西側（今泊～仲宗根） ……ダンコヨーダンコ スーリヤリクヌ

東側（湧川・天底・勢理客・運天・上運天）

……サンバヨーハリ ナストウカンシリ

本部や名護は概ね西側と同じで、東側のような囃しを入れない。

c. 歌詞・囃しとも異なるもの

一二揚……《カマヤシナー》《イルサスナー》

《カマヤシナー》 この曲は、歌詞中の地名が東西で異なる。

西側（今泊～仲宗根）……本部の地名がみられる

東側（玉城～運天）……本部の「^{とうぐちんなとう}渡久地港」が今帰仁の「^{うんてん}運天港」に置き換わる。

更に、以下のように曲尾の囃しが東西で異なり、西側の方が長い。

西側（与那嶺～謝名・勢理客）

……カマヤシナー スイ カマヤシナー カマヤシナー スリ（崎山の例）

東側（越地～運天）

……カマヤシナー

《イルサスナー》 この曲は、歌詞や囃しが東西で異なる。

西側（諸志～越地）……^{みちぼた}道端ぬさしや ^{すでいふ}袖振りば^{しが}縋る イルサスナー～

東側（仲宗根・湧川）

……^{とうじ}刀自すゆんすゆんでい ^{わねー}吾えうちきてい ^{ワネー}吾えウチキティ クイヌ～
名護や本部は「^{うわに}芋や煮ていあしが ^{しる}汁や今ならぬ～」が所々にみられる。

④ その他

本調子……《目出度イ節》《一路平安》と《^{とーしん}唐船どーい》

《目出度イ節》《一路平安》 この2曲は同系旋律曲で、上句と下句の旋律が異なる《目出度イ節》と上句旋律のみの《一路平安》に大別できる。後者は囃しの種類から以下の2種に区別できるが、今帰仁では2が多い。（以下の八、六には、その音数の歌詞が入る。）

《目出度イ節》 八八八 サンサ 六 目出度イ目出度イ スリスリ 目出度イ
《一路平安》

1. 上句（八八） テーソーアンピン 目出度ヤ目出度ヤ 嘉例吉嘉例吉～

2. 上句（八八） チールヒーヤヌ テーソーハンジン

^ヌ何ガ^ユ昨夜^ク来^{アミフ}ンタル ^ク雨降^クティ来^クンタサ サヨサヨサヨサイ

仲尾次・崎山・平敷には《目出度イ節》と《一路平安》の両方がある。また、天底の《目出度イ節》には「テソーアンジン」という囃しがあり、両者が混ざり合っている。

なお、本部では上記1が主流で、今帰仁に近い旧上本部村では2を歌う。名護は《目出度イ節》が主流だが、本部に近い屋部地区では1も伝承している。

《唐船どーい》 この曲は、エイサーでは道歌か出羽・引羽（入退場）としても用いられる。しかし、主に今帰仁の西側では本調子の終曲として踊る。

さて以上、今帰仁の主要なレパートリーの歌詞や旋律を検討し、今帰仁内での違いや本部半島地域全体でのありようについて述べてきた。本部半島全域に共通するレパートリーにも、《テンヨー》や《念仏》のように、今帰仁の独自性を示す歌詞が幾つかみられる。また、《今帰仁ぬ城》や《スーリ東》にみられるように、今帰仁全域が同じ歌い方を共有しており、それが他地域とは異なる場合もある。このように、今帰仁のエイサーは他地域と比較すると、レパートリーや歌詞、旋律の上で、今帰仁というまとまりを明確に示しているといえることができる。

しかし、地域性のあるレパートリーや囃しを中心とした細かな部分に目を向けると、かなり多くの点で今帰仁の東側と西側が異なることが解る。総ての曲の分布が均一でないとはいえ、現行の曲から見る限り、勢理客から東では明らかに西側とは異なる東側の特徴が認められ、同様に平敷から西では西側の特徴が顕著に認められる。したがって、その中間に位置する仲宗根や玉城・謝名・越地辺りが境界と考えてよい。実際、この区域は両方の影響が混じり合っているが、仲宗根・玉城には東の要素の方がより強く、謝名や越地は西側の要素が強い。

3. 舞踊の側面からみた今帰仁エイサーの特徴

(1) 舞踊の構成

今帰仁エイサーの大半の踊は、円周上を歩きながら腕を肩より上に挙げて手首を回す所謂カチャーシー風な手の動きに、歌詞や踊り手の囃しに合わせながら以下の動きを織り交ぜる。動きの組み合わせは、曲毎に踊り方が変わる区や、あまり変わらない区など、異同がある。

- ・手を叩く
- ・方向の変化……円の外側方向に180度回転し進行方向を変える

- ・円の外側の腕を前に出す（反対側の手は腰に当てる）
- ・腕を振るようにして歩く（円周上、あるいは円の中心に向かって歩く）
- ・当振り ・雑踊などにみられる、より舞踊的な動き

名護や本部の踊も概ねこうした要素を共有しているが、ここでは足運び、方向の変化、外側の腕を前に出す動き、当振りと舞踊的な所作に注目し、村内各区の踊や名護・本部の踊を比較して今帰仁エイサーの踊の特徴を捉えてみよう。

① 足運び

向きを変えたり円の中央に進むときなどでは通常と異なる足運びをすることもあるが、円周上の進行は、通常、2拍で一歩が今泊・渡喜仁・運天・上運天・勢理客・湧川で、それ以外は各拍一歩で進行する。即ち、今泊を除けば西側は各拍進行、東側は2拍一歩ということになる。今泊の場合は、近隣の本部町具志堅や新里なども2拍一歩なので、影響があるのかもしれない。また、東西の中間に位置する仲宗根では腕を前に出す動きが2拍一歩となるので、両方の要素が混じり合っているように見える。

他地域は、本部で2拍一歩、名護で各拍一歩が主流である。

② 方向の変化

今帰仁では、ほとんどの曲が開始と終わり（一節毎の終わりも含む）で向きを変える。このため、曲の途中で向きが変わらない場合、全体として踊の進行は一方向となり、反対に、曲の途中で変わる場合は双方向に進む。この部分に注目すると、西側では一方向の曲と双方向の曲が同数程度あるのに対し、東側の勢理客・上運天・渡喜仁・天底・運天では、ほとんどが一方向である。

本部では今帰仁と同様に曲の開始や終わりで向きが変化し、曲によっては途中でも変わるため、一方向と双方向がともにみられる。名護の場合、今帰仁や本部と同様に「方向を変化させる動き」は曲の始まりや途中でもあるが、半回転ではなく一回転が多いため、結果的に方向が変わらない場合もある。方向としては一方向と双方向がともにみられる。

③ 外側の腕を前に出す動き

この動きは今帰仁村全体でみられる。各区とも複数の曲がこの踊り方で、一旦この動きになると曲の半分以上でこの動きを持続させることもある。動き自体はどの区も同じだが、この動きに入る前に注目すると、西側（今泊～平敷）では手

を叩き、謝名より東では叩かない。また、この動きの曲数は西側より東側に多く、例えば上運天は大半の曲がこの踊り方である。

この動きは本部の具志堅や伊豆味、名護の大北などでもみられるが、一曲のごく一部にあるだけで、今帰仁とは全く異なる。したがって、この動きは今帰仁の特徴的な動きといえることができよう。具志堅や伊豆味は今帰仁に隣接しているので、今帰仁の影響をうけたのであろう。

④ 当振りや舞踏的な動き

当振りは、例えば《一路平安》の「雨降アミフティ」という囃しに合わせて雨が降る所作をする部分、《稲摺節》で「稲摺イニシり摺り（稲イニシり摺イニシり、の意）」に合わせて脱穀の所作をする部分、《仲門兄》の「女子三人二男イナグミツチャイサラ吾一人（女三人二男俺一人ダケ、の意）」の三や一を指で示す部分でみられる。同曲でも各区総てが当振りするとは限らないが、複数区で共通する動きをする。

舞踏的な所作は、前述の基本的な動きの間に挟み込む場合と、曲全体をこれで構成する場合とがある。《赤山》《ダンスナー》などが前者の例で、各区とも類似した動きをすることから、歌と踊が一对になって伝播したものとされる。他に、歩を進めずカチャーシー風な所作をする動きもあちこちでみられるが、こちらは曲が定まっていはいない。一方、後者の数は多くないが、仲宗根・湧川・渡喜仁などにみられる。特に、久志からのエイサーを伝承する渡喜仁にはこうした踊が多く、今帰仁では珍しい扇や采などの踊も含む。この他、今泊・兼次・諸志・平敷・越地の縦列の踊も、舞踏的な所作で構成されている。

当振りは、本部の場合、旧上本部村の具志堅や新里では比較的多いが、その他の区では《糸満人》の「ガマク（腰、の意）」での腰を振る動きや前述《稲摺節》の動きくらいで、全体に非常に少ない。名護でも《稲摺節》程度である。

一方、舞踏的な所作は、本部では伊豆味と旧上本部村の縦列の踊のみであるのに対し、名護では四ツ竹や扇、手拭などを用いた舞踏的な曲が本調子には多く、他地域とかなり異なる。

名護、本部、今帰仁はいずれも豊年祭が盛んで、舞踏的な動きはその影響と思われるが、名護にはそうした曲が多く、本部では非常に少ない。今帰仁はその中間とも言えるが、それぞれの踊を見ると、各区が個別に舞踏的なものを取り入れたというより、取り入れてエイサーとして定着したものが別の地域へと伝わって

いったと考えられる。

以上のように、今帰仁の踊は、全体としてみると、足運びや方向の変化、当振りや舞踏的な所作という点では、本部や名護とも共通する側面を持っている。しかし、外側の腕を前に出すという動きによって、今帰仁は両地域とは明確に異なる独自のまとまりを示す。一方、今帰仁内の各区の踊に目を向けると、足運びと方向の変化、腕を前に出す動きに入る前の動きには、東西で違いが認められる。

4. まとめ

今帰仁のエイサーを本部や名護との比較も交えながら、音楽と舞踏の両面から検討した結果、①今帰仁エイサーというまとまりで捉えられること、②今帰仁内では東西に明かな違いが認められること、が明確になった。以下、このことについて簡単にまとめ、その背景についても考えてみよう。

① 今帰仁のエイサーには以下の基本レパートリイがあり、その他にも多くの曲が多数の区で共通に伝承されているため、今帰仁全体で共通するレパートリイ数はかなり多い。特に一二揚の曲には今帰仁の独自性を示す曲も複数存在しているため、全体として名護や本部とは異なる独特のレパートリイ構成となっている。

本調子・《二合小》《テンヨー》《稲摺節》《今帰仁ぬ城》《海やからー》

《スーリ東》《久高万寿主》

一二揚・《カマヤシナー》《ダंक節》《仲門兄》《谷茶前》

《ダンスナー》《赤山》《イルサスナー》《海ぬちん法螺》

舞踏にもこうした傾向がみられ、名護や本部とは共通項も多いが、「外側の腕を前に出す動き」によって、今帰仁は明確に両地域とは区別されている。このように音楽、舞踏ともに今帰仁にしかみられない特徴があり、今帰仁エイサーは今帰仁というまとまりで伝承されてきたことが明らかである。

こうしたまとまりの背景には、青年達の意識や交流が関わっていることは言うまでもない。明治や大正に辿ることは今では困難であるが、例えば1952（昭和27）年頃～1960（昭和35）年頃まで行われたという村内のエイサーコンクールや昭和50年代の村内でのエイサー大会¹¹、戦後の縦列の踊の伝播（今泊→平敷→越地、天底→越地）などから、青年達のまとまりや交流、互いのエイサーからの影響などを窺うことができる。

② 一方、音楽ではレパートリヤや歌詞、囃しなどから、また舞踊では足運びや「外側の腕を前に出す動き」に至る過程、向きの変化などから、村の東側と西側に違いが認められることも明らかになった。西側に属するのは今泊・兼次・諸志・与那嶺・仲尾次・崎山・平敷で、東側に属するのは湧川・天底・勢理客・渡喜仁・上運天・運天である。謝名・越地・仲宗根・玉城は両方の要素が混在しているのでその中間ということになる。

今帰仁では、方言が西部と東部に大きく分かれ、その境界線は平敷と越地の間にあるといわれる。各々をもう少し小さいまとまりにすると、西部方言は、[今泊][諸志・兼次][平敷・崎山・仲尾次・与那嶺]に、東部方言は[越地・謝名・仲宗根・玉城][湧川][天底・勢理客・渡喜仁][上運天・運天]というまとまりになる¹³。エイサーにみられる違いは、この東西の方言の区分にかなり近い。例えば、前述《スーリ東》にみられる囃しの違いのまとまり－「兼次・諸志」「与那嶺・仲尾次・崎山」「謝名・越地・玉城」「仲宗根・湧川・勢理客・渡喜仁・上運天」－は驚くほどこの方言区分と重なる。エイサーにおける東西の違いの背景については今後も検討を要するが、方言のまとまりの範囲内では人と人との交流が深く、まとまりを外れるとやや薄れるという仮説から捉えるならば、この方言の違いがエイサーに大きく関わっているといえることができるのではなかろうか。

本稿では今帰仁エイサーのまとまりと東西の違いを、レパートリヤや踊り方の側面から明らかにし、その背景として、今帰仁村における村全体を巻き込んだ青年会活動と方言の違いという側面を挙げた。しかし、曲の伝播や伝承とその背景にはさまざまな要素の絡み合いがあり、その考察はようやく資料が集まったことで緒に就いたばかりである。今後は、三線弾きと踊り手の歌唱の関係、曲順、旋律の詳細な比較、各曲の踊り方の分析や比較など、本稿では検討できなかった側面の考察を進め、これまでの検討結果を踏まえて本部半島地域全域での伝播・伝承の問題を考えていきたい。

註

1. 「本調子」は、本来の「三下ぎ」から戻した調子なので「三揚^{あぎ}」が正しいと思われるが、所により「三下ぎ」といわれる。また、「一二揚^{いちにあぎ}」は、実際には一二絃を全音上げる場合と三絃を全音下げる場合とがあるが、多くの場合「二揚」、所によって時に

「三下ぎ」と呼ばれる。

2. 名護市は、名護地区・屋部地区・羽地地区・我地地区・久志地区からなる。本稿では、本部半島の付け根に当たる名護地区及び屋部地区を名護市西部として示した。
3. 名護市は、本調子の場合、世富慶・東江・城・大東・大中・大西・大南・大北・宮里・為又・中山・宇茂佐・屋部・旭川・勝山・山入端・安和の17区を、一二揚の場合は大西を除く16区を検討の対象とした。また、本部町は、本調子の場合、瀬底・水納・塩川・崎本部・健堅・辺名地・谷茶・大浜・野原・渡久地・東・大嘉陽・山里・伊野波・並里（大嵐を含む）・伊豆味・浜元・謝花・山川・備瀬・新里・具志堅の22集落を、一二揚の場合、水納・塩川・谷茶・大浜・大嘉陽を除く17集落を対象とした。

踊に関しては、名護市は、世富慶・城・大東・大中・大西・大南・大北・宮里・為又・中山・宇茂佐・屋部・旭川・勝山・山入端・安和の16区を、本部町は、瀬底・崎本部・健堅・辺名地・谷茶・大浜・渡久地・東・山里・伊野波・伊豆味・浜元・備瀬・新里・具志堅の15集落を検討の対象とした。

4. 古宇利は戦後一時的にエイサーを行ったというが、村史に「古宇利にはエイサーはなかった」[今帰仁村史編集委員会 1975:235]との記述があり、1917年生まれの古老も「見た記憶もない」ということなので、伝統的なエイサーは伝わらなかったであろう。
5. 本土の念仏踊りとは異なり、「不幸（＝不祝儀）のあった家」には行かないことになっている。
6. 湧川・渡喜仁・上運天などでは浴衣を着ていた時代もあるというが、現在は普段着である。
7. 各区とも2007年まで毎年、広場の櫓建ての確認を行っているが、年により建っていない区もある。
8. 《仲門兄》は、中南部では一般に《仲座兄》として知られる。
9. 《仲門兄》を当振りで滑稽に踊る形の「まがやー」は、本部町（上本部地区）の新里が現行で、備瀬が戦後まで、具志堅が戦前まで踊っている。
10. 《念仏》は数の上からは「基本的レパートリィ」に相当するが、表1では「地域的偏り」に入れた。この偏りについては、後述「(2)同系旋律にみられる共通性と相違性」の②で扱う。

11. 村内のエイサーコンクールについては、現時点の調査ではまだ詳細が判明していないが、「20組くらい出たことがある」という話もあるのでかなり盛んであったと思われる。本部町でも昭和20年代にエイサーコンクールが行われており、この時期にはこうした催しが全島的な一種の流行だったのかもしれない。
12. 方言の区分については『今帰仁村史』の方言に関する記述（pp.137-138）を参考にした。

引用・参考文献

- 沖縄県今帰仁村歴史資料館準備室編 1993 『なきじん研究3 今帰仁の歴史』
沖縄県今帰仁村教育委員会
大嘉陽分区50周年記念事業委員会編 1997 『大嘉陽分区50周年記念誌』
大嘉陽分区50周年記念事業委員会
国頭郡教育委員会 1967 『沖縄県国頭郡史』 沖縄出版会
小林公江・小林幸男 1997 「今帰仁エイサーの音楽—崎山・兼次・今泊の資料化を通して」『沖縄芸術の科学』第9号 沖縄県立芸術大学附属研究所
小林公江・小林幸男 2002 「名護市の手踊りエイサー—本部町・今帰仁村との比較を通して—」『関西楽理研究XIX』 関西楽理研究会
小林公江・小林幸男 2006 「[歌詞楽譜資料]沖縄県今帰仁村平敷の手踊りエイサー」
『関西楽理研究XXIII』 関西楽理研究会
小林公江 2003 「[歌詞楽譜資料]沖縄県今帰仁村与那嶺の手踊りエイサー」
『関西楽理研究XX』 関西楽理研究会
小林幸男 2003 「[歌詞楽譜資料]沖縄県今帰仁村越地の手踊りエイサー」
『関西楽理研究XX』 関西楽理研究会
仲里松吉 1978 『具志堅誌』 仲里哲次
今帰仁村史編纂委員会編 1975 『今帰仁村史』 今帰仁村役場
野原区創設50周年記念事業期成会編 1997 『本部町野原区創設50周年記念誌』
野原区創設50周年記念事業期成会
水納島研究会編 1981 『水納島』 水納島研究会